

北区岩淵周辺地区かわまちラボ-第4回-

議事要旨

日時：令和 8 年 7 月 7 日（火） 15:20～

場所：荒川知水資料館 3 階 地域交流スペース・ライブラリー
荒川下流河川事務所 1 階 アモアホール

1. 開会

2. 出席状況の報告

出席者

ラボメンバー：13 名（座長・副座長含む）

事務局（北区まちづくり推進課）：6 名

3. 議事【第一部】

（1）第3回かわまちラボの振り返り

○資料説明【資料本編 1：1～4 頁】

（2）空間活用について（グループワーク）

○資料説明【資料本編 1：5～12 頁】

○荒川知水資料館 3 階 地域交流スペース・ライブラリー見学、グループワーク

○班別発表：

【B 班発表】

（メンバー）

- ・開放的な窓があるので、本はその邪魔にならないようにレイアウトし直した方がよいと思う。配架された本は、毎月 PR コーナーを設け、きちんと読んでほしい本を PR することも必要ではないかと思う。
- ・内装については、床面はバリアフリーにして、テラスの方にも行きやすいようにすることが必要である。また、整備後に運営事業者が入るのであれば、運営しやすい形として、現状のイメージと少し変えてもらうことも必要だろうという話をした。
- ・コンテンツとしては、荒川の生態系を模した水槽を置いて、川に入るような雰囲気演出する、川の景色を活かしたカウンター席など 1 人用の席があると座りやすくなる、という話が出た。
- ・テラスに出た時には、屋外での映画上映やコンサート、ビアガーデン、パブリックビュー

イングなど、多少音が出たり、騒がしくても周囲に迷惑をかけにくい環境であるため、実施しやすいのではないかという話があった。

- 他、夕方に児童館のような子どもが集まれる場所にしてみようなど、休日と平日で来る層が違うので、平日はこういう使い方、休日はこういう使い方、というように使い分けられるようにした方がよいという話があった。特に飲食店系の運営については、1 事業者が入るよりは、日替わりで色々な方が出店できる（例：高校生のカフェレストラン等）ようにして、自由に参入できるような形で展開できると面白いのではないかという意見があった。

【A 班発表】

（メンバー）

- 皆さんから一通り意見を出していただいた段階で、大きく三つの意見があった。
- 一つは、教育やアフタースクール面である。子どもたちのたまり場をつくりたい、子ども食堂をつくりたい、治水的なところをパッケージにして色々学ぶ見学の拠点にしたい、といった意見があった。子ども食堂などは、なかなか収益化が難しいため、スポンサーをつけるなどの方向性も考えられる。
- もう一つは、道の駅スタイルで、ワンストップで、全部が完結するような仕組みである。食事もできて、スーパーのように地元赤羽・北区の食材・お惣菜が買えるとよい。サイクリングの方のサイクルステーションもあがった。また、マイクロブルワリー（ビールなどの小規模な醸造所）として、お酒を飲んだ後に泊まる、宿泊の拠点もつくる、トータルでのパッケージの拠点とする方向性の意見があった。
- 最後はスポーツやアウトドアの拠点である。ここをサイクリングやトライアスロンのベースとする、ヨガやジムを実施する、雨が降ってもピクニックを楽しめるような空間をつくる、といった意見が上がった。

【総評】

（副座長）

- 今日ここに来て景色を見て、皆さんとお話ししていると、空間的な設えをどうするか、どうやって使うか、色々なアイデアが出て、すごくよい議論ができた。どこまでを決めておくのか、というのがポイントとなる。事業者が入りやすいように、事業者に渡すためにどこまでは決めておかなければいけないのか、事業者の裁量がどこまで活かせるのか、どこまで反映できるかは、もう少し検討していかないとわからない。逆に、できる範囲がわかってくると、今日のアイデアがより具体的になり、実現できるのかどうかという判断ができてくる。この議論は引き続きやっていく必要がある。皆さんが今日いろいろ、イメージ

されたことを少し継続的に考えて、もう少し具体的な話をする機会を持てるとよい。

(座長)

- この中の設備として何が必要なのか、今洗い出していただいたものから、もう一段階落とし込む時間が必要である。意見を出していただいただけの段階のため、それに付随する設備はこういうものが必要である、それがどういう場所にあったらよいのだろうか、というところまで落とし込めるとよい。例えばシャワーが3個あればこの事業はできる、1個だったらこれしかできないという話など、一つずつ分けてみると、いろいろな可能性が広がるのかなと思う。
- キッチンが変わるとすると、飲食ができる範囲はどこまでか、できないとしたら他の仕組みや外でキッチンカーを使うなど、できないことに関して、どうすればできるかという考え方を、皆さんも知見として持っている。本日のグループワークは、不便な状況から、コンセプトを何に持っていくと、この場所に皆が来なくなるのか、ということが、全部詰まった状態になっている。これを次の展開でどう解像度を上げていくのかは、事務局の宿題である。大学生が入ってくれたことで、少し視点が広がった。本日は色々な属性の中で話ができよかった。

4. 議事【第二部】

(1) 本日の活動の振り返り

○資料説明【資料本編 2：1～7 頁】

○活動（あらかわ号乗船・水上アクティビティの運営検証・バルクル体験）の振り返りと親水護岸に関する意見交換

(メンバー)

- 親水護岸のA案、B案があるが、多様な使い方とすみわけができるとよい。現在設置されているデッキは利用されている様子を見かけるため、残してもよいと思う。

(メンバー)

- 本日体験いただいたのは、「ホビー」とうアクティビティで、厳密に言うとサップの一種である。船の形状はサップで、そこに椅子とペダルを付けたものになる。国内では作られておらず、アメリカから10年くらい前に入ってきた機材で、1人乗りのものは釣り人用に販売もされている。4人乗りは他にあまりないため、家族で乗れて、見た目がよいことから、それなりにニーズはあると思う。ただし、炎天下だととても暑いこと、雨や日差しの影響を受けることがデメリットであり、その点ではスワンボートが優れる。あくまで一つのツールの紹介であり、今後活用・運用していくツールについては、協議を重ねていく必要がある。いい面と悪い面があるため、皆さんにも考えていただきたい。
- 本日入水した箇所について、水に入った際に、泥が深く、くるぶしまでは泥に沈み込んで

しまい、体重をかけると抜けなくなる状態であった。現状のままでは危ないので、やはり整備は必要だと考える。

(メンバー)

- 本日の水上アクティビティの運営検証に参加できていないため、個人的な水上アクティビティの経験を踏まえてのコメントになるが、この場所は、流れが比較的穏やかで、初めてやる方にとって、いい場所ではないかと思う。熟練者は上下流の広域で楽しめるため、川を通じて拠点にもなり得る、大きなポテンシャルがあると思う。
- 水に入るために護岸整備は必要だと思うが、水上を歩くデッキは全国的にもあまりないと思われるため、活かした方がよい。スロープは滑って転ぶ危険もあり、デッキであれば安心して、水の上を歩きながら赤水門に近づけるため、デッキは残した方がよい。

(メンバー)

- パルクールを体験して、普段できないような遊び、運動が、今の時代に合ったいい形だと感じた。
- 水上アクティビティについては、赤水門を遠くから、上から見るのではなく、川の方から見ることができ、史跡に興味がある方にとっては非常に価値があると思う。荒川は釣り人によく使われるが、観光的な利用、史跡を巡る利用など、色々な使い方があると感じた。

(メンバー)

- あらかわ号、水上アクティビティに参加して、川から見る景色には非日常感があるため、定期的にやれば必ず人が来るだろう、と率直に思った。
- 護岸整備については、事故を心配する方がいるため、その点がクリアできればどちらでもよいと思う。あらかわ号で解説を受けたり、パルクールの指導者がいる中で体験できたりするのは、安心して参加でき、子どもにもためになると感じた。定期的にアドバイザー的な人がいると、みんなのためになると思う。

(メンバー)

- 基本的には皆さんの意見と重なる部分も多いが、水上アクティビティを体験して、赤水門に近づけること自体に迫力があって、とても楽しかった。運営の様子を見て、また自分でも感じたこととして、現況の護岸で水上アクティビティをするのは、足元が滑りやすく、乗り降りの際に怖さを感じた。今後、水上アクティビティを運用していくうえで、親水護岸の整備が必要になると改めて感じた。親水護岸の整備が進むと足元が安定するが、水に触れる部分のため、滑りやすさは残ると考えると、広ければ広いほど安全管理が難しくなると感じた。例えば小学生が集まっての水辺の学習や、花火大会のような大規模イベントで多くの人が集まることを考えると、親水護岸のエリアが広くなるほど、安全管理の難易度は上がると思う。そのため個人的には、A案の方が無難に感じた。

(メンバー)

- パルクールの教室を見て、今回のように指導者が教えてくれるような企画などがあれば、わざわざそこに行って参加するというような魅力の一つになると思った。水上アクティビティでは、足を滑らせてはまっている人の様子を見て、危ないと感じた。この場所は干満の差で泥がたまりやすく、コケがつきやすい場所であるため、安全面を考える必要があると思った。

(メンバー)

- 水上アクティビティから参加した。いまの護岸だと、水上アクティビティを実施するには危険だと感じた。水面に近いデッキを作る方が、船の貸し出しやカヤックを使ったイベントは実施しやすく、子どもの水環境の観察、学習にも生かせると感じるため、B案に近い考え方である。パークールに参加した際に、河川敷は近所の公園と異なり、大きな声で騒いでも迷惑をかけにくいという点で、子どもの遊び場として活用していくのはとても大事だと感じた。実際に指導してくれる人がいれば子どもの安全や学習の機会につながり、器具が置いてあるだけでも子どもが遊べる場所として使えるため、あるといい。

(副座長)

- 今回体験した船と水上アクティビティで、それぞれ役割分担がありそうだと感じた。普段見ない風景を見るという点では、広域に見るという意味では船がよく、より水面に近づいて体を動かすには水上アクティビティが向いている。それぞれ役割分担しながら、普段はできない体験ができるようになるとうい。しかしながら、あらかわ号は本来の役割があるため、どこまでできるかはご相談させていただけるとよい。観光ボランティアガイドの方や河川事務所の方に質問できたのもよかった。現場に行くと色々な質問が出てくるため、やり取りができたのは大変よい機会であった。
- パルクールについては、その隣接する活動が気になった。パークール設備の隣に、遊具、健康器具、ストリートスポーツ、BMX、スケートボードなど、広がり意識すると、河川敷でのアクティビティはもっと多様になって、多くの人が使えると思う。
- 親水護岸については、A案かB案で言えばB案に近いが、B案だと限界もあるため、B案プラスアルファとして、栈橋的なものなど、色々な活動を受け止める工夫が護岸と一緒に整備されると、皆さんから出たアイデアを実現するときの手助けになるかなと思う。A案は、水の上から水門を眺める視点場としてはよいが、それ以外に目的、コンセプトが見えにくいいため、色々な活動を受け止められる護岸整備の方がよい。

(メンバー)

- 個人的には、とても楽しかった。足こぎカヤック、パークールについて、今日参加した中で私は一番年上だと思うが、高齢者にとって適度な運動になった。やはり体験することが本当に大切だと思った。今までは、あのような場所でレジャー的なことはしない方がい

い、と言っていたが、レジャー、水上アクティビティは楽しく、賛成に意見が変わった。

- 親水護岸は、A 案か B 案で言うと、私は A 案を選ぶ。柵があると安心感があるためである。ただ、空間を広く取ることも必要であるため、今後の検討課題である。

(座長)

- 船が、日常的にもう少し使われることはないのか、と感じた。毎日運行する必要はないにしても、月に何回かでも、荒川のアクティビティで使われるとよいと感じた。荒川の話、河川の活用の話、水門の歴史の話を聞けることが大事で、水上からのインフラツーリズムとして、もっと使われてほしいと思う。使い方のルールについては、荒川に対して、危ないという意識、水がきれいではなく入りたくない意識があったが、本日のように水に浸からなくても遊べる形も含めて、皆さんの意識が大きく変わったのではないかなと思う。文化財に近づくための装置としての活用も出てくると感じた。
- そのためにも、栈橋なのか護岸なのか、両方あると思うが、いかに水面に近いところに接することができるか、が重要である。湖ではよく浮栈橋を使うが、ボートはある程度の水深が必要なため、浮栈橋からでないと乗れない。シーズンになると栈橋のパーツを出すような形で、アクティビティ実施時のみの栈橋、浮島など、完全に整備するのではなく、必要なときだけ出せるものや、栈橋の上からはしごで降りるなど、乗り場の考え方の設計がアクティビティに付随する。川口市側のように、階段が横に向かって降りていく形にすると、水位の高さによって乗り方を変えられ、常に深い側と接している状態を作れるため、アクティビティ向けにもなる。浅い方に向かって乗りたいときは浅い側で、深い方と隣接していれば常に一定の深さが取れる。そのため、階段の向きが平行である必要があるか、考え直してもよいと感じた。そうすると、安全の担保として手すりが常時ついているか、外せるかも含めて、考え方が少し変わってくると感じた。
- パルクールについては、アーバンスポーツ全般に共通することとして、1 回体験してみること、指導者がいることのよさを感じた。日常にあることで健康が維持される、健康意識をつくるためのツールとして、非常に良いと感じた。常設でなくても、実験的に置いて、どれだけの人が活用するか、という方法もある。色々制約は想定されるが、街中でコースをデザインできるとよい。また、例えばパーゴラにバスケットゴールを付けるなど、新たに整備されるベンチやパーゴラが健康やスポーツにつながるとよい。今回、色々な層の方が参加されたことで、どの世代でも体感できるというのが、ポテンシャルとして見えてきたのが嬉しかった。

(事務局)

- 検証の目的として想定していたこと以上に、皆さんそれぞれの気づきや、新しいテーマが見えてきたと感じている。水に入るというアクションを考えた際の安全管理の話と、日常的に水辺へ近づく場所としての設えと、多様な活動が受け止められるような空間の話を、

一度整理する。

(メンバー)

- ・階段は、A 案・B 案どちらも同じような形になっているので、階段の作り方をもう少し考えた方がよい。

(メンバー)

- ・階段の形状について、二点指摘がある。まず階段の高さはできる限り低く、浅い形がよい。また水中まで階段を続けてほしい。水中まで階段があって、そこで船の乗り降りが完結できるようにした方が、より安全である。
- ・個人で SUP を楽しむ方であれば、階段や両側の護岸で十分アプローチできる。しかし、イベントや常設で体験を行う場合は、滑れば頭を打って怪我もする可能性があり、また足首くらいまで水に入ることが前提となる。水位が動くため常設の栈橋は難しいが、イベント用や事業者のスクール用として、浮栈橋を備品として用意して、そのときだけ設置する形にすれば解決できる。素材については、石よりも、怪我のことを考えると木の方がよい。ほかの場所ではゴム素材も見られる。滑り対策には一工夫が必要である。
- ・全面が親水護岸でなくても、個人で乗る方は順番に入っていくので、問題は出ないと思う。逆に広いと、自分のサップを放置する方も出るかもしれないため、出入口はそれなりにまとまっているとよいのではないかと感じる。護岸の上の芝生の部分にある程度置き場があれば、個人の方々は「今、下が空いているから出よう」というような形で活用でき、安全管理はしやすいと思う。ゴミや譲り合いのルールを作っていた方がよい。広ければ広いほど多くの人々が来るという期待はあるが、事故の確率も上がる。親水護岸が狭いことでアクティビティがやりづらくなることはない。

(事務局)

- ・今日は安全講習を水際で実施されていたが、置き場以外にそのような空間の必要性はあるか。

(メンバー)

- ・例えばイベントで行うときは、20 人や 30 人で行うことはなく、5 人程度のグループが想定されるが、説明をする広場的なものがあつた方がよい。

(事務局)

- ・B 案は、栈橋の背面が広場として活用でき、滞在空間が確保できるメリットがある。ただし柵の安心感はないため、例えば B 案に柵を付けたらどうなるのか、という議論はあり得る。

(メンバー)

- ・個人的には、親水護岸は小さくてもよいのではないかと感じる。お城の出丸のような、小規模で突き出た構造の方が、管理が楽ではないかと思う。

(副座長)

- ・階段の赤い線のところが人が昇り降りする範囲で、青い線のところは二段使いで、腰を下ろせる設計である。構造上の段差の付け方として現設計がベストなのか。広場として、踏面をもう少し広くするなど、バリエーションが出せるとよい。

(事務局)

- ・踏面を広くする護岸の事例はあり、水上アクティビティ用と滞在用で分けるなど、工夫の余地はある。景観面について推進検討会の二井副会長とも協議して検討する。

(座長)

- ・デッキは、現況を活用して、補修はするがコースの形などは大きく変えない想定か。今後活用するとなると、老朽化しているため、デッキの張替えをするのであれば、コースの見直しを含めて検討した方がよい。

(メンバー)

- ・費用は A 案より B 案の方がかかりそうに思えるが、費用感はわかるか。

(事務局)

- ・費用感含めたメリット、デメリットは、国で精査している。ただし、維持管理面で、栈橋を将来的に維持し続ける費用を含めて比較する必要がある。

(メンバー)

- ・デッキは、おそらく平成 11 年か 12 年ころの竣工で、30 年弱経過していると思われる。維持管理は必要だが、先日踏み板の張替えは実施した。傷んできても、張替えや補修であれば費用を抑えられると想定される。
- ・関東や全国の川を色々見てきたが、水の上を歩けるというのは、他の川ではあまり見たことがない。空中を散歩するエアウォークのような道はあるが、水面の上を歩ける道は、大きな河川ではあまりない。
- ・荒川の特性は、三つあると思っている。一つは、低水護岸が貼られていることが荒川下流の特性である。江戸川では低水路が自然護岸で、洪水でわかる河岸が削られるが、荒川下流域では低水護岸が貼られているため、削られることはほぼない。二つ目は、潮汐の影響があることである。干満で 2m 程度水位が変動する。三つ目は、船の利活用が多く、走行波の影響があることである。干満の影響と、赤水門の上流は流速が出ないため、土砂が沈降して溜まりやすい場所である死水域（河道内の水面部分で流れのない場所、流量の疎通に関係のない部分）で、洪水時はあまり水の流れがない。どうしても護岸に土砂がたまり、コケが生えて、滑りやすい。他の親水護岸も、デッキブラシで常に掃かないと滑るが、維持管理面からほぼ不可能である。そのため滑りうるということを前提に考えた方がよい。引き波、走行波の影響もあるため、護岸に座って川を見ることを想定した際に、小さな子どもが座ると波に引っ張られる可能性もある。

- ・川口市の方で、階段により潮汐での水位差に対応するという話もあったが、洪水や船が当たる可能性がある。川に縦断方向に階段をつけるパターンであれば対応可能であり、高水が流れる場所でないため、そのような護岸を長く整備することも、他の場所と比べて実施しやすい。

（２）活動体制について

○資料説明【資料本編 2：8～18 頁】

○意見交換

（座長）

- ・活動体制について皆さんから意見をもらうのは、なかなか難しいと思っている。今回、事例を示しているが、これがすでに完成体系なのか、どこからお金が出ているのか、何年かけてここにたどり着いたのか、などがわからない状況である。それらも含めて考えたときに、このかわまちラボの体制がこれからどう変わっていくのか、見え方は大きく変わりうる。各々がどのように関わっていったらいいか、活用するためにはどこにどう申請して何をしなければいけないのか、という役割分担ができあがる。現状は、ラボが使用主体と連携して、使用主体が占有主体に届出を出す図になっている。ラボの活動が来年度以降どうつながるべきか、これから調整していくことと思っているが、皆さんが活動しやすく、意見の通る形にしたいと思っている。図には、一旦それぞれの役割を書き出しているが、矢印の方向に対して役割がついていないため、その役割が何なのかを少しでもお話できるとよい。

（副座長）

- ・例えば 14 頁の浦安の例で、イベント利用者、出店者から「境川かわまちを進める会」に対して両矢印が出ていて、その連絡、調整、連携と書いてある。これが具体的にどういうことなのかのかわかると、この矢印の意味が明快になって、我々として何を議論すべきかがわかる。

（事務局）

- ・図の矢印中身までは読み解けていない。おそらく、「進める会」が何かイベントを行うときに、「進める会」から主体的にアプローチする場合があるとイメージしていた。

（副座長）

- ・事例を調べていただけると、我々の議論が具体的になると思う。今回、このラボの特徴として、自らプレイヤーである方がたくさんいらっしゃるため、この議論もここに合わせて具体的に進めていけるとよい。

（メンバー）

- ・15 頁を仮の体制図として出しているが、これは他の事例と比べると新潟の例（16 頁）に近いのか。新潟の例は、民間事業者が指定管理者に近いイメージである。その場合、こ

の場所において指定管理を誰がやるのかが課題になる。一方で、浦安の例（１７頁）は、自治体と事業者の入った協議会が占用主体で、自治体の役割が大きいと想像される。どちらの形をとるのかで大きく異なる。仮の体制図における指定管理者の役割を、この場所でどういう形で行っていくのかが、事例に情報があると考えやすい。

（事務局）

- ・浦安の例では、「進める会」については、どちらかというと活動団体が主である。最近の説明資料を見ると、行政が作っているというより、活動団体・民間が主体で作られているように見受けられる。市が全体を仕切っているというよりは、各活動団体がそれぞれの部会を立ち上げている、という趣旨で事例を紹介した。

（メンバー）

- ・体制を考えるにあたって、オープン化について、どう考えているのかを確認したい。会員制にして、会員にならないとできないという形にするのか、もっと全然違う事業者も参加しやすくするのか、オープン化の目的がどこまでかによって、体制が異なりうる。

（事務局）

- ・オープン化の目的は、本来、営利活動ができない場所で、民間の方も活用できるようにすることである。今回のオープン化の占用主体は北区のため、誰でも自由に営業活動ができるわけではない。団体数が増えるほど管理は難しくなる。一定の条件をクリアした団体を登録する形を考えている。

（メンバー）

- ・今一番大きく使っているのは花火会で、色々な申請を通していていると思う。花火会の規模のイベントができる体制であれば、小規模でも実施できるのではないか。

（事務局）

- ・花火会のような場合は、公共性での判断もあるため、大きなイベントができるから小さなイベントもできるとは限らない。

（メンバー）

- ・占用主体が北区となることは決まっているのか。

（事務局）

- ・オープン化区域の申請はこれからだが、占用主体の想定としては北区しかなり得ない。
- ・その理由として、オープン化の区域に入れて活動する条件としては、その区域の維持管理も必ず行う必要がある。緑地全体の面積はとても広く、その区域をオープン化した場合に、一般の方が維持管理するのは難しい。現状は、指定管理者制度を使って緑地の管理をしている。オープン化する際も、イベントができるだけでなく、維持管理が必ずセットになるため、北区が占用主体として、指定管理者制度により維持管理をする想定である。
- ・利用主体がどうなるか、が今後の議論である。登録制か公募が考えられ、運用ルールを決

めていくこととなる。皆さんが今後プレイヤーとして活動するときに、どういう関わり方がよいかは、今の事例だけではわからないため、また勉強会のような形で検討を進めていきたい。

(メンバー)

- ・新潟の事例は、民間事業者に出店料が入るため、この立ち位置になることにメリットがある。一方で、浦安市の事例は、お金の流れ、「進める会」の人たちがどのような目的で取りまとめをしているのかわかりにくい。結局、事務局である浦安市が実質的な業務や取りまとめをせざるを得ないのではないかと考えられる。その場合、このかわまちラボ、北区が実質的な運営・取りまとめをしていくのか、それともラボに新潟の事例の民間事業者のような役割を持たせたいのか、という点が課題になる。もし後者の方向性であれば、ラボにお金が入る仕組みを考えないと現実的ではない。実行委員会形式か法人格かわからないが、主となって動く人、年間で常駐するような人を設けないと、この形は現実的ではないと思う。

(事務局)

- ・事務局をどこが担うかは、区が担うパターン、指定管理者が担うパターン、ラボの方で新たな人材が担うパターンもあると思うが、まだ全く決まっていない。参考となる団体へのヒアリングにより、どのような体制となっているか、また民間に任せるには収益がないと成り立たないので、その仕組みについて、勉強していく必要がある。

(メンバー)

- ・その点が明確になってくると、かわまちラボの方向性も見えてくると思う。

(事務局)

- ・指定管理の切り替えが令和10年度からになるため、次の指定管理者にどこまでの業務を任せるのか、庁内でも検討を進めている。それと合わせて、あらたなプレイヤーがどのように関わっていくのか等、運営スキームを検討していく。

5. 議事【第三部】

(1) 今後の活動について(意見交換)

○資料説明【資料本編3：1～4頁】

○荒川知水資料館東洋大学との連携協働成果発表紹介

○意見交換

(座長)

- ・前提条件を整理する必要がある。例えば、オープン化される場所の中で活用するにも、エリアの問題がある。すでにバーベキュー場は、リバーサイドフェスティバルとして使われる状況なので、どこのエリアまで我々が使ってよいのか、先ほどのアモア3階の活用がで

きるのかなど、条件を洗い出したうえで、プログラムを検討した方がよい。

（事務局）

- これまでの意見交換で、防災ステーションもぜひ活用してみたいというご意見が多くあった。リバーサイドフェスティバルが開催される 11 月 28 日は、バーベキュー場がメイン会場となる。防災ステーションまで距離があることから、防災ステーションの活用検証は年明けに行う方が現実的かと考えている。まずは、指定管理者の自主事業と、どのようなコラボレーションができるのか、という視点でご意見をいただき、事務局で案をまとめて皆さんにお示ししたい。

（座長）

- 防災ステーションとの同時開催は十分あり得るのではないか。防災ステーション側でも別の団体が主催で行うなど、2 か所で実施することもありえる。

（事務局）

- 2 か所で行う場合、そこをシェアサイクルでつなぐというプランもあるが、各会場が遠くても実施の可能性があるか、ご意見をうかがいたい。

（メンバー）

- 以前、赤水門と青水門の間の広いスペースで、子どもたちがスポーツチャンバラをしてみてもどうか、という提案があった。

（事務局）

- 赤水門と青水門の間の「ムーンライトスタンド」と言われるところで、花火会の有料席になっている場所である。今回オープン化の区域の候補地にもなっているため、可能性としてはありえる。

（メンバー）

- リバーサイドフェスティバルに相乗りするというイメージではなく、同日に、例えば子どもたちが並んで体験できる体験会を行う、ということでも問題はないか。

（座長・副座長）

- 問題ない。

（メンバー）

- まちとの回遊性のようなところがない。志茂銀座商店街などの紹介を交えて、例えば先ほどのアモア 3 階のカフェで商店街の飲食店に総菜などを出してもらうなど、町会との関わりを多少持った方がよい。イベントは切り離されることが多い。リバーサイドの宣伝を依頼する等の関わりを、町会としても受け入れやすくなるのではないか。

（副座長）

- リバーサイドフェスティバルの目的や実施内容を教えてほしい。

(メンバー)

- メインは音楽イベントである。地元のアーティストに演奏していただいて、それに付随してバーベキューやキッチンカーも楽しめる。時間帯や音楽のジャンルは、周辺への影響も考えながら設定している。イベントは 10 時から夕方 5 時まで、演奏開始は 11 時頃から夕方 4 時頃までである。

(メンバー)

- イベントに参加する人たちのことを考えると、まちとの連携や、お寺との関わりなどが案にあげられているが、参加者にとって、参加した証拠があるとよい。例えば、荒川の水門のマンホールカードをもらいに来る人がたくさんいる。小さなものでも、意識が高まると思う。

(事務局)

- 11 月には、一般の方がラボ活動に参加する場面も考えられるため、参加した方が発信できる、実感を持てる手法を検討する。

(座長)

- 複数の企画が混在してもいいが、一時使用などの申請としては、ラボとして出す必要がある。それぞれの団体のやりたいことを出していただいてもよいし、「これを行うので手伝ってください」という形でもよいと思う。例えば、今日のようにパルクールの方をお呼びしたいという話が出れば、その場所や延長線上で何かつながることがあるとよい。
- 指定管理者から、リバーサイドフェスティバルの情報を、もう少しいただけるとよい。エリア図だけでも、ここが使える、という情報をいただくと、その先の計画がしやすい。準備段階でもあると思うが、資料を提供いただけるとよい。

(事務局)

- 11 月 28 日の前提条件については事務局で確認し、実施内容については改めてアンケート等で確認する。